

外部評価報告書

令和元年10月

農学部・農学専攻

目 次

まえがき	1
I 外部評価概要	3
II 外部評価委員会記録	4
III 外部評価委員会質疑応答	6
IV 外部評価委員会委員長「講評」	13
V 外部評価結果調査票まとめ	15
VI 附録資料	
資料1：外部評価結果調査票様式	29
資料2：外部評価委員会次第	38
資料3：外部評価委員会概要説明用スライド	40
資料4：評価委員会委員名簿	50
あとながき	52

まえがき

静岡大学は、平成 16 年度の国立大学法人化後から、6 年を 1 期とした中期目標・中期計画を策定し、事業を行っています。この進捗状況の評価するため、各中期計画期間中に種々の観点から、法人評価、自己点検評価（組織評価、学生等評価）、認証評価（期間別認証評価、専門職大学院認証評価）などを受けています。令和元年度は第 3 期（平成 28～令和 3 年度）の 4 年目にあたり、本学部も静岡大学評価会議の指示のもとに自己点検評価を実施することとなりました。平成 31 年 3 月に自己評価報告書を作成し、この自己評価書をもとに令和元年 7 月 5 日に外部評価委員会を開催し、外部評価報告書を取りまとめました。

外部評価にあたっては、農学分野の教育、研究、生産、政策などに精通している岐阜大学理事（副学長） 福井博一氏、静岡県経済産業部農業局長 細谷勝彦氏、公益財団法人農業・環境・健康研究所長 陽 捷行氏、クミアイ化学工業株式会社経営企画部長 井上 淳氏、JA 静岡経済連理事長 加藤敦啓氏の 5 名に委員をお願いしました。各位には、ご多忙にもかかわらず快くお引き受けいただいたことに感謝申し上げます。

農学は、地域貢献、国際化への対応などの社会的な要請に対して、教育・研究を通して課題解決の方策や技術を提案するとともに、様々な問題を解決できる有為な人材を産業界に輩出することが求められています。このミッションを果たすため、本学部では、3 期の開始年度（平成 28 年度）に共生バイオサイエンス科、森林環境科学科、応用生物化学科の 3 学科から生物資源科学科、応用生命科学科の 2 学科に改組し、同時に生物資源科学科には植物バイオサイエンス、木質科学、地域生態環境科学、農食コミュニティデザインの 4 コースを設置しました。また、幅広い多様な人材を受け入れるための入試改革も行い、生物資源科学科に専門高校生を対象とした自己推薦型入試を導入しました。一方、修士課程においては、平成 27 年度に農学、理学、工学並びに情報の理系 4 研究科を総合科学技術研究科に「大きくくり化」したことに伴い、農学研究科も農学専攻として出発しました。一方、さらに、建物の改築も行い、充実した教育・研究環境が装備された新たな農学総合棟が平成 29 年に完成しました。このように第 3 期は、新しい環境の中、新体制で農学のさらなる発展の歩みを進めた時期となりました。本年は改組の完成年にあたります。この間の取り組みを外部の方々の視点から評価していただくには相応しい時期であると考えます。

AI、SDGs、人生 100 年時代など、日本が変換期を迎えている一方で、大学では少子化にともなう学生数の減少への対応や大学再編など変革が求められています。今回の外部評価の結果は、これまでの成果に対する客観的な評価であることはもとよりですが、本学部・専攻が発展する方向を検討する上で、きわめて貴重なものであり、今後の取り組みに反映させる所存であります。委員の皆様には多大なる時間を割き、貴重な意見を

くださったことに改めて心より感謝申し上げます。

最後に、膨大な資料収集と、自己評価報告書、外部評価報告書の作成に携わった本学部・専攻の自己評価委員会委員並びに関係各位に感謝申し上げます。

令和元年 9 月 吉日

静岡大学農学部長・総合科学研究科農学専攻長

森田 明雄

I 外部評価概要

1. 各実施組織が実施した「自己評価」の結果について、学外者による評価・検証を受けることで、各実施組織の教育・研究等の質的向上及び組織の改善・活性化に繋げることを目的に実施する。

2. 外部評価の実施方法

- (1) 自己評価報告書・参考資料及び外部評価結果調査票を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を依頼する。
- (2) 外部評価委員会を開催し（半日又は1日）、組織の概要・自己評価結果の説明、施設・設備等の見学・調査と質疑応答等を行う。
- (3) 外部評価委員会から、委員会開催当日に、事前調査及び当日調査の結果について講評を受ける。
- (4) 外部評価委員から、事後に、事前調査及び当日調査の結果について、前記（1）の外部評価結果調査票の回答を受ける。
- (5) 外部評価結果を報告書にまとめて公表する。

3. 外部評価委員

加藤 敦啓 様（JA 静岡経済連 代表理事理事長）
陽 捷行 様（公益財団法人農業・環境・健康研究所 農業大学校 校長）
細谷 勝彦 様（静岡県経済産業部農業局 局長）
井上 淳 様（クミアイ化学工業（株） 経営管理本部経営企画部 部長）
福井 博一 様（国立大学法人岐阜大学 理事・副学長）

4. 外部評価の日程

平成30年11月	外部評価委員の推薦
平成31年3月	自己評価報告書の作成
令和元年5月	外部評価委員の委嘱
令和元年6月上旬	自己評価報告書及び参考資料を外部評価委員に送付
7月5日	外部評価委員会開催
7月中	外部評価委員から外部評価結果調査票の提出
9月	外部評価報告書のとりまとめ
10月上旬	外部評価報告書の公表

II 外部評価委員会記録

1. 日時 平成31年7月5日(金) 11時00分～16時00分

2. 場所 農学総合棟225室

3. 出席者

外部評価委員

委員長 福井 博一 様	国立大学法人岐阜大学 理事・副学長
加藤 敦啓 様	JA 静岡経済連 代表理事理事長
陽 捷行 様	公益財団法人農業・環境・健康研究所 農業大学校 校長
細谷 勝彦 様	静岡県経済産業部農業局 局長
井上 淳 様	クミアイ化学工業(株) 経営管理本部経営企画部 部長

農学部関係

森田 明雄	農学部長・総合科学技術研究科農学専攻長
鳥山 優	農学部副学部長、総合科学技術研究科農学副専攻長
平井 浩文	農学部副学部長、前年度評価委員長
切岩 祥和	生物資源科学科長
笹浪 知宏	応用生命科学科長
山下 雅幸	附属地域フィールド科学教育研究センター長
轟 泰司	教務委員長
加藤 雅也	入試委員長
木村 洋子	全学評価会議委員
渥美 武	農学部事務長

4. スケジュール

11:00～12:00 農学部長挨拶

出席者紹介

委員長選出

外部評価委員委員長に福井委員を推薦し、委員全員から了承を得た。

自己評価結果の概要説明

平井副学部長・前年度評価委員長が、スライド(資料2)を用いて、自己評価結果の概要を説明した。

13:00～14:00 質疑応答

具体的な内容は、「III 外部評価委員会質疑応答」に記載する。

14:00～14:30 施設・設備の見学

以下のとおり、施設等の見学を行った。

- ① 応用生命科学実験の見学
- ② 食品栄養化学研究室の見学
- ③ 木質構造学実験の見学
- ④ 学生研究室の見学
- ⑤ 学部共通の低温室・恒温室の見学

14:45～15:30 外部評価委員会

外部評価委員のみによる委員会が開催され、事前審査及び当日調査に基づき、評価のまとめが行われた。

15:30～16:00 講評

福井委員長を始め、各外部委員から講評を頂いた。

5. 当日配付資料

- ・ 農学部・農学専攻外部評価委員会出席者名簿及び次第
- ・ 外部評価の実施指針
- ・ 外部評価結果調査票
- ・ 自己評価説明資料
- ・ 自己評価報告書正誤表
- ・ 農学部案内

Ⅲ 外部評価委員会質疑応答

福井委員：

静岡大学農学部を考えてみた時に、「フィールド科学」は教育の中で特に重要であり、かつ、3つのポリシーとすごく関係してくると思われるが、どういうイメージで位置付けているか。

山下：

このフィールド科学教育研究センターは、平成14年度に、3附属施設（附属農場、附属演習林、魚類餌料実験実習施設）を整理統合し、3部門からなるセンターにした。その当時、大学の中期計画の中で、フィールド科学に重きを置いた教育をしていくという方針が出されたため、それに沿う形で、平成18年度から農学部でも「フィールドワーク」という枠組みでの教育研究を開始した。具体的には、附属施設のフィールドを利用して、1年生から学部共通的な基礎部分を修得することを目的に、フィールド科学演習Ⅰ、Ⅱという科目を設けた。

福井委員：

現在の応用生命科学科と、このフィールド科学、あるいはフィールド科学教育センターとの関わりについて伺いたい。

山下：

センター化する前は、旧農芸化学系の学生が実習に利用するということはほとんどなかったが、センター化後に、農学部の基礎科目としてフィールド科学演習を設けたことで、専門教育ではラボワークが中心になる学生も、自然科学やフィールドワークを、視野を広げるという意味で体験している。

福井委員：

「体験をする」という意味合いだとすると、ちょっとイメージが異なる。農学部というのは、フィールド科学を基礎にしていると言われたが、要は半分強の学科（学生）にしか関係していないように見える。農学部全体としてのフィールド科学というベースとは何か、いいお答えを頂きたい。

森田：

旧農芸化学系の学生は農場にほとんど行くことなく卒業していたが、センター構想になってからは、フィールド科学演習を、100%の学生が1年次に受講しているため、今では応用生命科学系の学生も、そういう現場を知るという体験をしているというのが1点と、あと、実践農学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（それぞれ1年次、2年次、3年次に開講）を農学部全学生が受講可能であり、本演習Ⅰでは、梅ヶ島や稲子という地区に、週末、学生が現場に入り、農作業の手伝いをしたり、地区の手伝いをしながら、山村の方々と話し合うことで、その地域を知り、本演習Ⅱでは、そこで課題を見つけ、またどの様にして解決するのか、というようなこと行っており、最終的には農業環境リーダーの称号を授与している。本演習が、一番のフィールド科学教育というところでは当てはまるどころだと考えている。さらに、海外フィールドワークでは、外国に行き、そこで農業体験が出来る演習もあり、これらを複合的に触れることで、教育的な効果が発揮されると考えている。

福井委員：

実践農学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲをまたいでいる形でしょうか？

森田：

その通りです。ただ、1年次は約100名の学生が受講しているが、学年が上がるに連れて少なくなっていくのが現状である。ただ逆にいうと、受講生が少なくなった分、地域とのつながりが非常

に強くなり、卒業後も交流が続いていることから、そういう面では非常に高い評価が与えられると考えている。

鳥山：

補足ですが、静岡大学におけるフィールドワークとして、例えば工学部では「ものづくり」というものを導入している。座学に対して、実物を手足を使って体験していくというのが、静岡大学におけるフィールドワークであり、その農学部版を農学部は実践している。応用生命科学科においても、確かに実験室にて様々な実験を行っているが、その中の現象も元々はフィールド（外）に存在しており、そういうところに視点を向けたり、課題探求したりとか、そういったものを重視している。そういうふうな意味合いがそのフィールドワーク重視ということに繋がっており、農学部全学科にまたがっていると、と捉えている。

井上委員：

大学はもちろん、農学部の大きな目標として、地域の貢献、それからグローバル化が掲げられている。アンケートの結果ではいろいろな取り組みをされてはいるが、効果としては限定的ではないか。梅ヶ島に参加する学生がほぼ限定的で、全学、学部の全学生に対してフォローできているとは思えないが、こういったところへの取り組みを、今後どういうふうにしていくのか。

森田：

国際化についてはどこの大学もほぼ同じような傾向であり、学生次第である。地域貢献については、静岡大学としては「地域」というのは避けて通れない部分である。そう言う意味ではアンケートの採り方にも問題があると思うが、結局は、(学生が行っている) 研究が、何のために、どこを向いて、誰のために、誰の幸福のために行っているのかを明確する必要があり、そういう意識付けが極めて重要である。現状の学生は、何故勉強しているのか、何故研究しているのか、さらに誰が幸福になるのかっていうところまで見通せていないので、そういうところに注力していくことが、地域貢献の最初だと考えている。国際貢献にしても、アンケート結果が低いところは意識付けが重要だと考えている。

井上委員：

大学の大きな役割として、人材の輩出がある。今回の自己評価において、農企業に多くの人材を輩出していた。それ自体も地域貢献だと考える。よって、その様な視野も持って頂けると良いと思う。

森田：

ありがとうございます。

加藤委員：

基準8の内部の教育システムについての質問で、FD 研修等への農学部教員の参加者数が 200 名とありますが、この数字が高いのか低いのか判断が難しい。同様に基準11において教員の学会等での表彰一覧というのがあるが、これ自体が果たして満足出来る値なのか。相対評価なのか、絶対評価なのか。

陽委員：

追加ですが、全体的にそういう傾向があり、表記されている値がどのくらいの価値があるのか不明である。

平井：

現在内部質保証委員会では、FD 研修会等への参加率 90%を目標としており、それは達成してい

る。表の中の 205 名という値は、1 教員が 1 回参加すると 1 名となり、参加者数の延べ数を示している。教員の受賞件数は、あくまでも前回の自己評価との比較しか出来ないが、前回と比べるとやはり増加傾向である。

自己評価の作成要領に関して、平成 30 年度の段階でどうだったかを評価するように作成されており、平成 30 年度を評価するために、その前の年度、2 年前、3 年前という情報を比較対象として掲載している。

加藤委員：

少なくとも前回の調査から向上しているかどうかを検証しており、ある目標値まで達成されているかどうか、という評価ではないということか。

森田：

その通りです。

加藤委員：

目的がそういうことだと、評価がなかなか難しい。

鳥山：

本来であれば、前回との比較もあり、他大学との比較も本当は評価しないといけませんが、その様な評価は難しい。

森田：

1つ1つの数字を評価するということもあるが、例えばこの FD 研修会等への参加者数で言えば、平成 29 年度に急激に増えているのは、教育質保証委員会の設置に起因している。こういう農学部の取り組みの結果として、農学部教員の 90%がどこかの講演会に必ず参加しているということが読み取れており、相対的にどうかというよりは、こういう見方のほうが正しいと考えている。

井上委員：

それはカリキュラムポリシーが教員の方に浸透して、教員の教育に対する意識がかなり深まったというふうに理解できるということか。

森田：

その通りです。カリキュラムポリシー等が浸透していくことが一番大切な点で、教育質保証委員会が機能することで、さらに質の高い教育が出来ると考えている。

福井委員：

FD 研修会等への参加者を高めるような取り組みは行っているか。

森田：

出来る限りリマインダーを出したり、開催日時を教授会の前に開催するなど出来る限り教員が集まりやすい開催日時を選んだりしている。しかしながら問題点もあり、参加する教員は複数回参加するが、参加しない教員はどの研究会にも参加しない。この様に参加しない教員をどの様に参加させるかが今後の課題である。

陽委員：

今回の自己評価書において、チューター、IR、FD、SD、ループリック、カリキュラムマップ等の専門用語が使われているが、この様な専門用語については説明書をつけて頂きたい。

今回の自己評価において優れている点は、カリキュラムに各農学基礎論を設置している点で、他大学ではこの様な農学原論的な講義を行っているところが極めて少ない。

大学は研究・教育・普及（あるいは社会福祉、社会奉仕）といったこの 3 点を評価すべきである

が、教育と研究のことしか言及していない。大学は外から何を受信しているのか。そして、大学はそのことに対してどういう討論をしているのか。さらに、教育・研究・普及に対してどの様に活用しているのか。最終的にその活用がどう発信されているのか。この様な観点は極めて重要である。

さらに、教員の中には研究が得意な人もいれば教育が得意な人もいる。組織の中で、分業制を取り入れたらどうか。そうすることで、個々の教員の特性を大いに生かせると思う。

森田：

教育研究、社会貢献、地域貢献は、農学部、さらに静岡大学が求めている方向性である。農学部としてどこまで出来るか分からないが今のご意見を参考にしながら、評価システムを整理・検討したい。

鳥山：

6年前に行った外部評価において、同時に有識者会議を開催し、陽先生にはどちらにも参加して頂いたが、その時のご意見をもとに、今回の学科改組が行われた。そういう意味では陽先生の言われたことは参考にさせて頂き、現在に至っている。

社会への貢献というのは単に学生を送り出すだけではなく、社会における大学の役割や、学問の本来あるべき姿など、こういったものの提言を外に向かって発信していくのが大学の役割であると思っている。

福井委員：

追加データを教えて頂きたい。1つは入学者の地域別データ。もう1つは、基準11に関連する事項で、知的財産に関わる学部の実績を、3年でも結構なので教えて頂きたい。

平井：

知的財産に関する業績は405ページの方に掲載している。入学者の地域別データは後日お答えする。

福井委員：

これらのデータが、COC+等に関連してくる。

陽委員：

静岡大学農学部で博士の学位を取得し、海外の大学等で活躍している留学生をもっと積極的に公表・宣伝すべきである。

森田：

フィリピンのマリアノマルコス大学の学長は静岡大学農学部の卒業生である。

陽委員：

評価において、卒業生が何人出たとかではなく、その人たちがどのようなポストに就いて、世界やアジアでリードしているかを記載する方が、評価としては正しいと思う。

鳥山：

アドバイスをありがとうございます。

細谷委員：

日々、多くの卒業生と仕事をさせてもらっており、その観点からお尋ねします。24ページにディプロマポリシーが4つあります。この1から4までを全て兼ね備えた人物を育成しようというのが、静岡大学の方針だと思います。このディプロマポリシーを達成するためにカリキュラムポリシーがあると思うが、気になったのが、「124単位」というのが卒業に必要な単位である。自由科目が20単位あって、その他に教養科目が31単位、ここで既に51単位になる。そうすると、残りの単位

で農学部の専門科目を履修しないとイケないが、それで本当に網羅できるのか？その辺の検証が出来ているのかもしれないが、自由科目を 124 単位に入れてしまうのは決まりなのか。

森田：

その通りである。

細谷委員：

カリキュラムごとに、ディプロマポリシーのどの部分に対応しているのか、その辺が分かるような図があると分かりやすい。さらに、履修の終着点は卒業論文であるが、学生間で成績の違いがあると思う。その成績の違いは何に由来するのか、成績の良い学生はこの様な履修モデルで修学してきた等の情報の積み重ねがあると、ディプロマポリシーに合致した学生が卒業するので、就職受け入れ先としては大変ありがたい。

陽委員：

私が農水省の公務員試験の面接委員をやっていた時、学生に「あなたの卒業論文は何ですか？」と問うた時、答えられる学生で答えられない学生がいる。さらに、「卒業論文タイトルを英語で答えて下さい」と問うと、ほとんどの学生が答えられない。しかし、翌年、同じ質問をすると答えられる学生が増える。面接での質問内容が学生間で共有されている。この件と細谷さんの意見は通じるものがある。

森田：

前述のように教育の質保証において、授業科目と教育目標の関係を示した「カリキュラムマップ」を作成しており、この様な教育の質保証の取り組みが大きく関連すると考える。コメント頂いた通り、学生個々がどの様な経路で講義を履修してきたかを解析していくことで、将来的に反映されてくると考える。また、卒業論文は集大成であるという認識は私たちも持っており、この卒業論文を正確に評価することは非常に重要である。しかしながら、教員個々で評価法が異なっており、現在、評価基準項目と評価方法（ルーブリック）を学生に明示して、それに基づいて各教員がそれぞれの学生の卒業論文を評価するというようなことをやり始めている。この様な取り組みが、教育の質保証に繋がっていくと考える。また反転すれば、カリキュラムの改正にも繋がる。それが今度は改組に繋がったり、色々なところに関係してくる。

鳥山：

今のところ、その評価の観点がディプロマポリシーと直結しているかということ、必ずしもそうならないように感じており、その点は見直したい。大学において、急にこの 3 ポリシーをしっかりと決めないとイケない状況になり、現在、改善の途中である。そういう意味で、次の外部評価までには、これらの点は改善されてないとイケないと考える。

前回の自己評価から学科改組を行い、その過程で自由単位を 20 単位としたが、我々もこれで良かったのかと悩む点がある。ディプロマポリシーは、4 項目全てを兼ね備える必要があると謳っているが、学生も多種多様であり、伸ばし方も多様だと思う。よって、弱いところを伸ばしてあげるのがいいのか、強いところをもっと引き上げてあげるのがいいのか、その辺は学生の適性によって変えていかないとイケないと考える。さらに、4 項目全てと捉えると、型にはまった人材しか造れないという問題も出てくるので、そこは柔軟に考える必要がある。よって 20 単位という自由科目は、学生が自由に選んでくるものではなく、教員が学生の能力に応じて履修指導を出来るように当初は設計していた。それが実質化しているかどうか検証しないとイケない。

福井委員：

ルーブリックを導入しているというのは、すごく先進的だと思う。卒業研究は徒弟制度みたいなものだが、そこを客観的に評価して、達成度を自己点検する、いう取り組みというのは、私はすごく優れている点だと思う。FDとしてそれをやっているのは評価が出来る。

鳥山：

ルーブリックを作っている人たちが、今度それを他の教員に勉強してもらおう研修会をやるので、その人数が研修会等参加数に計上されている。

森田：

学生に評価項目と評価の基準を示すところが大事で、それをお互いに教員側と共有することによって直接の指導につながり、評価項目や重視項目もはっきりするので、学生のほうも助かるという意味で、私たちも期待している。ただ、これまでの評価とこのルーブリックを使った評価が、どれだけ当てはまるのか、かけ離れているのかという点を、今年、試行したところである。

福井委員：

よく言われるのは、ルーブリックは義務教育のようなところでは活用しやすいが、高等教育で本当に使えるのかという意見がある。義務教育のように画一的なものについては、成長、発達段階において的確に捉えることができるが、卒業研究や高等教育でそれを的確に把握できるかどうかというのは、未だに安定してないというところもあるので、大学ではあまり取り入れてないというのがある。

森田：

学生の研究が上手く行った、行かないだけで評価したくないため、きちんと出席したとか、結果は上手く出なかったが頑張った程度とか、そういうところをきちんと評価したい。その辺を重視してルーブリックを作成したい。あとは、評価の手法とかウェイトについては、多少教員間でバラツキがあるため、教員個々の裁量も認めていかなくちやいけないうのが、去年試行した教員からの意見がありました。

井上委員：

オープンにするのも大切だと思う。それが教員間で異なっているのも当然だと思う。1つ質問ですが、研究戦略推進室というものがあるが、これはどういう役割で、どういう体制でなっているのか。

平井：

研究戦略推進室は、設立して4年目になる。研究戦略推進室の組織的位置づけですが、教務委員会、入試委員会、その他委員会と並列的な形で位置づけられており、研究に特化して、農学部はどういった研究を推進していくのか、また科研費獲得向上に向けた活動を行っている。

森田：

研究戦略推進室の提案で、数年前からプロジェクト研究の推進を行っている。学部内で、プロジェクト研究を募集し、それを審査して、採択課題には100万円を配分している。いわゆる萌芽的研究を学部内で育てたいということで、特に若手教員を中心とした研究の強化を行っている。

井上委員：

組織ってどうしても縦割りになりがちなので、こういう横串を刺していく活動は、すごく大切だと思う。あと、陽先生言われたとおり、一番初めにその大学そのもののガバナンスの説明があって、大学の目指すべき姿があり、その下に農学部のガバナンス体制を初めに出していただけると、理解しやすいと思う。さらに、解説的なものがあるとありがたい。

森田：

その意見は農学部だけではなく、全学のほうにも反映させたい。

陽委員：

未来を生きていく上で、グローバルの問題と情報の問題は避けて通れないと思う。基準10に教育情報ってあるが、先にも述べたように、やはり教育・研究・普及という情報を評価の対象にしないといけない。この点については、執行部はいつも頭に入れておかないといけないテーマだと思う。

森田：

ホームページの活用についてはいろいろ考えてきており、数年前にスマホ対応にした。外国人の留学生をABP等で約10人を毎年受け入れているので、そういう学生をさらに増やすための広告としても使いたいため、去年は英語版を再作成している。さらに、もう、各教員の研究内容を、もう少し分かりやすくしたいとも考えている。

陽委員：

農業環境技術研究所では、土壌マップを提供している。そうすると静岡県の〇〇地域の□□川の土壌情報が得られる。この様に、農学部の情報が静岡県の農業にどれほどすぐに使えるか、そういうデータを提供すると、本当の普及につながるので、それをシステム化するように検討して頂きたい。

森田：

はい、ありがとうございます。

細谷委員：

基準12の地域貢献活動ですが、今ここに書かれていることは地域貢献活動としてやられている活動ではない。教育や研究の成果が、そのまま地域貢献になっているというような、その辺をうまく表現できるものがあると思う。温泉トマトの話とか、前段の研究の成果のほうに載っているが、実際はそれを使って、既に営農を始めている人がいて、静岡県の農業作戦の一部になっている。そういう意味では、これも地域貢献だと思う。

鳥山：

ありがとうございます。もしよろしければ有識者懇談会を開催し、ご意見を頂く場を設けたい。

IV 外部評価委員会委員長「講評」

福井外部評価委員長のまとめ

- 全般として、結果的に1周しているという評価は出来る。ただ、すべてが完璧だということではなく、私のほうからいくつかコメントするので、さらに改善をして頂きたい。
- 基準3について、もう少し組織としての評価をすれば、さらに教員の意識向上につながるかと思う。委員からの意見で、研究については点数化しやすく、評価しやすい。しかし、本来、大学は研究だけではない。特に教育と社会貢献に対する評価方法が必ずしも適切ではないというところが、一番の問題提起であり、特に改善して頂きたい。
- 基準4において、アドミッションポリシーが明確に定められているのは理解出来る。しかし、それを経て入学した者が、どのようなカリキュラムマップ、カリキュラムポリシーに従って学習し、最終的にそのポリシーを満たした段階で、どのような関係になっているのか。個別入試で入学した者と、推薦入学で入学した者は、果たしてどういう関係になって、卒業段階ではどういうふうになっているのか、これらを的確に数字で示すような分析が必要である。大学によっては、そのようなデータは持っている。例えば1年生のGPA（前期・後期）データがあり、4年生になるとGPAはどういうふうになっているか、これらの情報を入学者ごとに解析し、相関関係を10年ほどやってみる。専門高校でセンター試験を課さない推薦入試入学生は、どうしても最初の頃のGPAはどちらかという低い傾向にあるが、2年生の後半から4年生までのトータルのGPAは、むしろ遜色ないという結果が得られている。アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーは、この様な調査を継続することで、どういう教育指導が必要となるか、に繋がっていくと考える。
- 基準9（財務基盤及び管理運営）について、静岡大学も間接経費の一部が部局に配分されていると思う。そういう面で、基準11の科研費、受託、共同研究を見ると、共同研究、受託研究の件数が少ない。この部分を上げていかないと、学部長裁量経費という形の財源が出て来ない。ここをぜひ進めて頂きたい。
- 組織図について、本来、学部長と事務長は対等でないといけない。教学関係部長としての学部長と、総務・事務管理体制の長としての事務長というのは、本来対等であるべきであって、特に緊急体制とか、そういうところと関わってくる。この点はぜひ改めて頂きたい。
- 学部長のガバナンスが発揮できるような体制ぜひ構築して頂きたい。そのためにも、外部資金の獲得にもう少し力を入れる必要がある。
- 基準12で記載されている地域貢献とは何なのか。大学としての地域貢献、あるいは農学部としての地域貢献というのは何なのかという定義が定まってなく、農学部としてあるべき地域貢献とは違うのではないか。資料として添付されているものは大学全体のものであり、農学部という特性が十分に記載されていない。
- 静岡県立大学と教育研究、あるいは社会貢献も含めて連携出来る学部の1つとして農学部は重要な位置にあると思う。現在、一法人複数大学を進めていると思うが、それに加えて、静岡県立大学との連携を、農学部としてぜひ積極的に取り組むべきではないか。ところが、連携研究が活発ではない。学生の単位互換くらいである。むしろ静岡大学農学部として、静岡県立大学との連携を、教育、研究、それから社会貢献も含めて、積極的に行って、そのリーダーシップを取っていくという方向性をぜひ実行して頂きたい。

その他、委員からのご意見

加藤委員 全体としては、非常に基準もしっかりできていますし、それに沿ったものが出来ているが、部分・部分のところで、考慮が必要なところがある。基準1 2の地域貢献にしても、載っている情報だけではない。例えば、お茶とか、ミカンでとか、そういった産業に対してどういった貢献が出来ているのかということでも、十分、地域貢献である。中には、大学があること自体が地域貢献になるので、今の静岡らしい部分をもっと伸ばしていけるような貢献もあると思う。もっと地元根ざしたような貢献のあり方というようなものを感じた。

陽委員 教員が夢を持って明るい方向で前を向いておくと、後ろから学生が付いてくる。要は、教員が、情熱を持って、たくさんの情報を持つことによって、学生達が付いてくると思う。

学部長のガバナンスについて。民主主義を選ぶのか、トップダウンを選ぶのか、あるいはトップダウンと民主主義の調和を選ぶのか分かりませんが、学部長のガバナンスについて今一度考えて頂きたい。

教育と研究と普及、この問題が教員の中で浸透していくことが、明るい方向に向かう1つの素材ではないか。

細谷委員 よい学生を世の中に出していくことが、地域貢献そのものになっていくと思う。そのためにはディプロマポリシー、それにぶら下がっているカリキュラムが重要になってくる。その整合性を、また検証させて頂きたい。

教員評価のところ、特に学生を育てていくという意味で、教育のところの評価方法が、今日のこの資料でも見えない。どういう学生を育てていくかという時に、教育における教員の評価基準というのは、大変ではあろうが、やるべきである。

井上委員 なんのためにこういうことをやっているのかということだが、結局、静岡大学の価値をいかに高めるかということだと思う。では大学の価値とは何か？と考えると、どれだけ質の高い教員がいるのか、そしてどれだけ質の高い学生を育てて行けるのか、という部分に尽きる。そこからこの様なシステムが生まれてきていると考える。読ませて頂き、本当によくやられているというのが率直な感想である。特に評価の見える化や、内部質保証など、こういうものにチャレンジして、教員をよく巻き込んでやっている。教員もすごく関心を持って取り組んでいる。

改善点として、学部長のリーダーシップがより取りやすい体制をどういうふう構築するか。大学は、すごく変化の激しい世界なので、その環境変化に対応して、いろんな施策を打っていかねければいけない。その時に、全部を教授会に諮って・・・というようなことで、本当に対応出来るのだろうか？と感じた。システム、規則もそうだし、啓蒙もそうだし、学部長を支えるスタッフもそうだが、そういったところを改善できたらと考える。

学生の中で「グローバル化」が満足出来ていない。また企業の方の評価でもそうなっている。グローバル化を進める上で絶対必要なのは、英語力である。英語でコミュニケーションできる基礎学力を改善出来たらと考える。

女性教員の登用について、もう少し高い目標設定を持って取り組むべきじゃないかと思う。

V 外部評価結果調査票まとめ

外部評価委員（A～Dの4名、順不同）より、自己評価報告書に基づく事前の検討、大学での説明・質疑応答・見学を含む外部評価委員会、および事後の検討を経て提出いただいた外部評価結果調査票（フォーマットは、資料1参照）における評価点および評価コメントをまとめて以下に示す。

《外部評価結果調査票における評価点のまとめ》

各基準の評価は1～4段階

4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。

3：概ね達成している。概ね適切・良好である。

2：改善が必要である。

1：抜本的な改善が必要である。

項目		外部評価委員				平均 評価点
		A	B	C	D	
基準1	組織の目的	3	4	4	3	3.5
基準2	教育研究組織構成	3	4	3	2	3
基準3	教員及び教育支援者等	3	3	3	3	3
基準4	学生の受入	3	4	4	2	3.25
基準5	教育内容及び方法①	4	3	4	4	3.75
	教育内容及び方法②	4	4	4	3	3.75
基準6	教育成果	3	3	3	3	3
基準7	施設・設備及び学生支援	4	4	4	3	3.75
基準8	内部質保証システム	3	3	4	3	3.25
基準9	財務基盤及び管理運営	3	3	4	3	3.25
基準10	教育情報等の公表	3	4	4	3	3.5
基準11	研究活動の状況及び成果	3	4	3	2	3
基準12	地域貢献活動の状況	3	3	4	3	3.25
基準13	国際化の状況	3	4	4	3	3.5

《外部評価結果調査票におけるコメントのまとめ》

【基準1】組織の目的について

農学部/研究科の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>農学部・研究科の目的は明確に定められており、大学一般に求められている目的に適合していると評価する。ただ、静岡大学としての目的が明確にされていないため、大学の全体的な方針との整合性が評価し難い状況になっている。大学の全体目的から学部、研究科、学科等にブレイクダウンしてくるような目的になっているとより分かり易いのではないか。</p>
<p>B 委員：評価点 [4]</p> <p>分析結果のとおり適合している。</p>
<p>C 委員：評価点 [4]</p> <p>学部・研究科の目的が関係規則等で明確に規定されており、内容も適合している。外部評価委員会において、「フィールド科学」の定義及び範囲について確認し、農学教育として適切な回答を得ることができた。</p> <p>以上のことから、「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」と評価した。</p>
<p>D 委員：評価点 [3]</p> <ol style="list-style-type: none">1. 静岡大学の規定と中期目標（12-1-①-1, 2）は最初に提示すべきである。最後まで読まないで出てこない。資料の順序が適切でない。2. 教育目標と研究目標をつなぐシステムが必要。システムがあって、はじめて成果が出る。3. 大学の農学部の使命は、教育・研究・普及（社会貢献）であるとするならば、目標に普及の項目が必要と考える。4. 学科・専攻の三学科ごとの教育研究目標に一貫性がない。人材育成や、産業界や研究機関への輩出であったり、職業人養成であったり。それとも、異なるのか？5. コースの場合、いずれも教育と研究しかないが、普及はどうなるのか。6. 目標にセンターの話はあるが、持続型については書かれてない。

【基準2】教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、農学部/研究科の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>学部の学科の改組が実施されたばかりで、研究科と一致していない部分はあるが、経過としては致し方ないと理解しています。組織構成は、時代の要請に合わせて機動的に改組なども行っており、学部・研究科の目的に照らしても適切な内容となっている。</p>
--

<p>また、運営体制は適切に整備、機能していると評価できる。</p>
<p>B 委員：評価点 [4] 学科の構成、コース制など適切な構成である。</p>
<p>C 委員：評価点 [3] 学部組織が平成 28 年度に再編整備され年次進行中であることから、その教育効果を評価する段階には至っていないが、教育研究の目的を達成するための運営組織は適切である。大学院研究科組織においては、学部からの進学率が 45%前後であることから、学部と連携を持つ 6 年間を通じた教育組織であることが必要であるが、再編整備以前の学部教育組織と連携しているため、今後の大学院研究科の再編整備が不可欠となろう。 地域フィールド科学教育研究センターについて、1 年次の学部共通科目「フィールド科学演習Ⅰ・Ⅱ」を担当しており、専門教育科目では生物資源科学科との教育支援体制が充分であることが示されているが、応用生命科学科との関係が明確ではないことが懸念される。しかし、全学部共通科目としての実践農学演習Ⅰ～Ⅲでの取り組みは高く評価できる。 このような観点を含めて、「3：概ね達成している。概ね適切・良好である。」と評価した。</p>
<p>D 委員：評価点 [2] 1. 教育実施体制の資料（103p）が明確でないうえ、そのつながりが理解できない。 2. P103 と p107 の違いは何か。 3. 大学院修士論文の判定基準はあるのか、ないのか。 4. フィールド科学の評価は、だれがどのようにするのか。 5. 企画・教務・教育質保証委員会の連携と統合のシステムは考えてあるのか。</p>

【基準 3】 教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

<p>A 委員：評価点 [3] 教員の採用、昇格や教育、研究活動の評価はおおむね適正に行われている。質の維持もされており、補助者の活用も適切にされている。 ただ、女性教員の全体に占める割合は低く、今後改善をしていく必要があると思われる。また、教員の評価に当たっては、研究活動の評価に偏ることなく、教育や普及に対する評価にも重きを置くようにしてバランスの良い評価方法を取り入れたら良いと思う。</p>
<p>B 委員：評価点 [3] 学科や職位によっては、女性の教員が不在であるので、一層の充実を図ることが望まれます。 研究以外の分野での業績評価においても、客観的な基準が設けられれば、教員の意欲や意識の向上につながると思われます。</p>
<p>C 委員：評価点 [3]</p>

学部学科・研究科専攻における教員配置は適切に行われている。教員選考（昇任を含む）にあたって、研究業績に関する実績評価は適切に行われていると判断できるが、教育業績に対する評価についても十分に考慮することが望まれる。専任教員における女性教員数（率）が他大学と比較して少ないように見受けられ、一層の対応が必要である。

このような観点を含めて、「3：概ね達成している。概ね適切・良好である。」と評価した。

D 委員：評価点 [2]

1. テニユアトラックの意味がわかりませんでした。文科省を含め多くの省庁でカタカナを活用するのは、やめてほしい。ゲートキーパースキルアップとは、何かお分かりですか？せめて用語解説が必要。
2. 教員の教育と研究と普及活動をどう評価しているか。教育・研究・普及に注ぐ時間と成果はまちまち。これらの評価の判断基準が必要である。
3. 民間など学外の人的資源の活用展望と財源計画が知りたい。
4. 要員配置で、副学部長と学部長補佐の違いは何か。規定はあるのか。
5. 教授の資格に学位があるのか。助教などについての資格の理由は。
6. テニユアルトラックの実例が知りたい。

【基準4】学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

A 委員：評価点 [3]

入学者受入方針も明確になっており、入学定員も計画をほぼ充足して適正な運用が図られている。今後は、推薦入学者等について追跡調査（入学後の）を行い、総合的な評価の下、選抜方法などの見直しが必要かどうか検証していくことが必要と思われる。

B 委員：評価点 [4]

明確な AP の下、定員の充足が図られており、適正である。特に、コースごとに各科目の最低ラインを公開していることは、受験生にとって、大変有益であると思われます。また、AO 入試合格者の追跡調査も実施されており、評価されます。

C 委員：評価点 [4]

アドミッション・ポリシーが定められ、学外に対して適正に公開されている。また、AO 入試を含めた多岐にわたる入試を実施しており、定員も充足している。今後は、これらの様々な入試方法で入学した学生の在学中の学修状況や卒業後の進路を含めた追跡調査を行い、アドミッション・ポリシーの再検討を含めた分析を行って欲しい。

大学院修士課程の進学率は 45%前後で一定しており、高い定員充足率を維持している。

以上のことから、「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」と評価した。

D 委員：評価点 [2]

1. 過去の成果は？ 総合力のある学生が排出されたか。追跡情報がなければ、成果を判定できない。

2. 推薦入学者の成績と行く末は？ 推薦入学者の割合とその理由？
3. タイのコンケン大学に行ったとき、教員に静大卒業生が何人かいた。外国人の採用規定や卒業後の追跡データがないと評価しにくい。
4. 入試問題と目標とする総合的な人間の育成がどのように関係しているのか。

【基準5】教育内容及び方法について

①（学士課程）

教育課程方針（カリキュラム・ポリシー）が、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

A 委員：評価点〔4〕

教育課程方針と学位授与方針は整合的であり、教育課程の編成・実施方針は適切に定められており、運用も適切に行われていることを評価します。

今後も、教育内容、方法について常に細心の注意を払って検証、運用をしていってほしい。

B 委員：評価点〔3〕

CP と DP は整合的と認められ、成績評価や単位認定もシステムとして機能していることは評価されます。

特に卒業論文のルーブリックの導入は高く評価されます。

CP や DP で求める資質・能力と、カリキュラムの必修、選択の割合、教養科目と自由科目の割合、CAP 制度との関連などを整理した資料があると、一層効果的な評価が可能であると思われま。

C 委員：評価点〔4〕

ディプロマ・ポリシーを達成するためのカリキュラム・ポリシーが定められており、アドミッション・ポリシーとも整合性が認められる。

実践農学演習Ⅰ～Ⅲは、2 学科全ての学生を対象とした 1～3 年生の通年実習であり、特徴的な教育プログラムであり、高く評価できる。

教育の質保証の観点から、GPA 制度を活用した CAP 制を導入していることは評価できる。卒業論文は個々の指導教員の主観的評価に陥りやすく、学生の学修成果評価が難しいが、これに対してルーブリックを導入し、客観的な学生の学修評価法の確立に取り組んでいることは全国でも特筆できる取り組みと言える。特に、ルーブリックは初等・中等教育では高い評価を受けているものの、高等教育では必ずしも評価が一定しておらず、ルーブリック自体の高等教育における評価効果の検証にも役立てることができると考えられ、一定の成果が得られた段

階で成果・効果の公開をお願いしたい。

また、学部学生から修士・博士課程の学生が混在する居室体制が取られており、特に学部学生の学修に良い効果が出ていると推察され、これについても成果・効果の検証を行い、公開をお願いしたい。

以上のことから、「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」と評価した。

D 委員：評価点〔4〕

1. 「農と食の哲学」などに見られるような、農学原論の講義ができる大学のシステムを高く評価したい。とくに生き物を対象にしている医学部などもこの種の原論が必要。生命科学の農学と医学には、不可欠と考える。
2. 外部講師の活用は、学生のみならず教師にとっても有益である。ただし、講座にあるモニター主義がなければの話。
3. 他大学の単位を許容している点を評価したい。とくに卒論や修士論文の過程で行われる必要がある。講座の教授の力量が問われるが。
4. FS システムもよい。

②（大学院課程）

教育課程方針が、学位授与方針と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

A 委員：評価点〔4〕

大学院課程においても学士課程同様、適切に行われていると評価します。

B 委員：評価点〔4〕

①と同様。

C 委員：評価点〔4〕

静岡県試験研究機関との連携大学院に取り組んでいることは高く評価できる。また、単位互換制度に基づいて静岡県立大学や東海大学などの科目を履修した学生がいる。

今後の静岡大学の将来構想を考える上で、薬学部・食品栄養科学部・経営情報学部を有する静岡県立大学との連携は、農学部・農学専攻として一層重要になってくると考えられ、教育・研究の両側面からの強固な連携を進めて欲しい。

以上のことから、「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」と評価した。

D 委員：評価点〔3〕

1. 専門に深入りせざるをえないので、一般的な評価は難しい。要は指導教官の人格と力量

によるところが大。
2. 公正な成績評価があるなら、具体例で示してほしい。

【基準6】学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>卒業生の満足度もある程度高く、就職等の内定率も高い数字となっている。就職先も学習した内容が行かせる分野に多く送り出しており、おおむね満足できる結果となっている。今後は、他大学との比較をするなど、静大農学部がどこに位置しているかを明確にして更なる向上を図ってほしい。</p>
<p>B 委員：評価点 [3]</p> <p>DP で求める資質・能力に対して、教育の効果は上がっていると評価されます。</p> <p>なお、学部生と院生で共通して、情報通信技術活用能力が身についたとする学生が50%程度で、今後の農業でも AI や ICT 人材が求められることから、カリキュラムの検証が必要と思われます。</p>
<p>C 委員：評価点 [3]</p> <p>カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーが十分に満たされていると判断できるが、アンケート結果などが単年度で示されており、経年変化を示すなどの工夫が必要である。特に、学部再編を行っていることから、学部再編によってどのような変化が見られたのかを検証する必要がある。</p> <p>入学者の出身地域と卒業生・修了生の就職地域先を比較すると、関東への就職の割合が多いことが判り、いわゆる「地域定着」の観点から課題を指摘されるかもしれない。この点について、さらに検討する必要がある。</p> <p>このような観点を含めて、「3：概ね達成している。概ね適切・良好である。」と評価した。</p>
<p>D 委員：評価点 [3]</p> <ol style="list-style-type: none">1. 成果を卒業前に判定する方法以外に、ペーパー試験でなく卒業後の在り方を問う必要がある。アンケート、同窓会、講座のOB会などの調査も必要であろう。稲を作るには1年あと、木を作るには10年あと、人を創るには100年後を考えて、というではないか。2. 教育には、卒業後して社会にでたあとの様子を知る努力が必要である。

【基準7】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

A 委員：評価点 [4]

<p>施設・設備等は整備されており、学生支援も総合的に適切に行われている。学年が上がるほど満足度が向上しているのは、学年が上がるにつれてより学部が身近なものになってくるからだと思われる。</p>
<p>B 委員：評価点 [4]</p> <p>H29 年に改築された農学棟は、ネット環境や研究室の確保など工夫されており、学生に高い満足度を与えています。</p> <p>履修に対する支援も担任制やチューター制など配慮されています。</p>
<p>C 委員：評価点 [4]</p> <p>適切な支援体制が取られていると判断できる。</p> <p>気になった点を強いて挙げると、「資料 7-2-②-3」で、教員に対する親近感が 1 年～3 年生までは学年進行（学部）に伴って高まるものの、4 年生では 3 年生より評価が低くなった。同様に、研究科 1 年生と 2 年生を比べると、「まったくしなかった」学生が増加している。卒業研究の取りまとめや修士論文の取りまとめにあたって、学生と教員との関係や、あるいは学生の精神的な問題など、何か潜在的な課題があるのかもしれないと懸念を感じた。（杞憂であれば幸いです。）</p>
<p>D 委員：評価点 [3]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過剰支援は物を考える学生が育たないという立場にたつ。教育の原点にたつた、考えさせ支援をどう構築するかを考えるシステムが必要。 2. チューターの成果は？

【基準 8】 内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>教育の質の向上への積極的な取り組み姿勢が見えており、取組は適切に行われている。</p> <p>今後は、そのレベルが期待通り向上しているか検証するとともに、明確な目標を設定して取り組むようにしてほしい。</p>
<p>B 委員：評価点 [3]</p> <p>内部質保証システムは、体制が整備され、適切に運用されており、実績もあがりつつあります。教員の研修参加の増加が期待されます。</p>
<p>C 委員：評価点 [4]</p> <p>カリキュラムマップの作成に加えて、新入生セミナー、卒業論文研究、修士論文研究においてルーブリックを導入し、教育の質保証に取り組んでいる。</p> <p>FD研修が定期的に関催されているが、教員全員の参加とまでは至っておらず、参加者増加のための方策を講じる必要がある。（一般に、教育に高い関心を持ちFDへの参加を必ずしも必要としない教員がFDに参加し、本来FDに参加させたい（参加すべき）教員が参加しない</p>

という傾向にあり、漫然とFDを開催するのではなく、対処方法を講じる必要がある。）

D 委員：評価点 [3]

1. 内部質保証システムがわからない。最近構築したもので、今後の成果に期待したい。
2. 先にも書いたが、カタカナ言葉はわからない。外部評価委員の規定を今回いただいたが、規定にれば、様々な職業の人で、主婦まで入っている、IR 室？ FD？ SD？ ルーブリック、テニユアトラック、ポリシーなど、こんな方言分かりますか。文部省の言葉なら、通訳して表現するのが新設というか、当たり前のことではないでしょうか。

【基準9】財務基盤及び管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。

A 委員：評価点 [3]

運営体制、事務組織は適正に整備されており、機能していると評価できる。

より良い体制構築のため、教員と事務職員の関わり方（緊急時など）の見直しをしたら良いと思う。また、ガバナンスをより発揮できる体制の構築や、外部資金獲得のためどのような体制がよいのか、民主的運営に配慮をしつつも他大学を参考に検討されたらどうか。

B 委員：評価点 [3]

管理運営体制は適切に整備され、機能していますが、教員を中心とした組織が充実している一方で、事務局の役割を強化することも必要と思われます。

C 委員：評価点 [4]

学部管理体制、事務組織が適切に整備され機能しているが、今後、学部長をはじめとする学部執行部（企画運営会議）のリーダーシップが重要になると考えられ、副学部長の選任方法の検討や、事務長の役割の強化などを検討していただきたい。

上記の対応に取り組んでいただけることを期待して、「4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。」と評価した。

D 委員：評価点 [3]

1. 学部長が学部長を決める方法はないだろうか。
2. 学部長補佐と副学部長の役割がはっきりしているのか？
3. 緊急事態の対応は事務長が上でないのか。それとも副学長と同列か。

【基準10】教育情報等の公表について

農学部/研究科の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

A 委員：評価点 [3]

Web ページ等での公開も適切に行われており、閲覧状況も一定の評価はできる。ただ、この閲覧数字が十分なものであるかの検証がなされていないので、他大学の状況なども踏まえ

<p>てアクセス状況が十分であるか、改善の余地があるのか検証をされたい。</p>
<p>B 委員：評価点 [4] 適切に情報公開が行われている。</p>
<p>C 委員：評価点 [4] 教育研究活動の情報公開は適切に行われている。 ただし、資料 10-1-②-3 の示されている農学部公式 Web ページの訪問者数・閲覧数の月平均値の 5,500 (183/日)・35,000 (1167/日) は少ないと思います。 (福井個人の HP(https://www1.gifu-u.ac.jp/~fukui/index.htm)よりも少ない。) HP 閲覧の魅力を高める必要があり、適確な改善を図ってください。</p>
<p>D 委員：評価点 [3] 1. 教育と同様に研究と普及の情報が公開されなければならない。</p>

【基準 1 1】研究活動の状況及び成果について

農学部/研究科の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

農学部/研究科の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

<p>A 委員：評価点 [3] 年を追うごとに確実に改善されてきていることは各種のデータ等で十分評価できる。しかし、その数字が十分なものであるか検証されていないので、さらにレベルアップをするために他大学の状況などを参考に検証されたい。特に、共同研究、企業・行政からの受託研究などが少ないのではないかとと思われる。</p>
<p>B 委員：評価点 [4] 研究戦略推進室が設置され、研究活動の強化が図られており、プロジェクト研究や公募型研究資金の獲得で実績が上がっています。</p>
<p>C 委員：評価点 [3] 若手教員に対する研究支援体制が整備されている。 岐阜大学では全教員に対して科学研究費の申請が義務化されている。3年間申請していない教員が多く見られる。まず全員が申請書を作成して申請することが重要であり、申請書の作成は研究の原点であるとの意識が重要です。 資料 11-2-①-3 の数値が間違っていなければ、受託研究及び共同研究の金額が少ないように感じる。</p>
<p>D 委員：評価点 [2] 1. 足りない。 2. シンポジウムや専門部門の学会開催の開示も必要。例えば、この秋の日本土壌肥料学会の大会が農学部で開催される。 3. 科研申請は、文科省にとどまらず、会社での公募がたくさんある。これを活用されたい。 4. 研究成果の評価を文献活用（サイテーション）の評価を導入すべし。</p>

【基準1 2】 地域貢献活動の状況について

本学及び農学部/研究科の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>地域フィールド等の施設の一般開放や出前事業の実施など地域貢献活動は適切に行われていると評価します。</p> <p>ただ、今後は静大農学部として地域貢献活動がどうあるべきかについて更に深く考えていくことが必要ではないかと思えます。地元に着目した研究課題への取り組みを更に強化する、地域の農業振興に取り組むなど地元の農学部としてできる地域貢献をさらに検討してみたい。</p>
<p>B 委員：評価点 [3]</p> <p>中期計画に地域貢献活動の一つとして、地方公共団体との連携や企業等との共同研究や技術移転が掲げられており、一層の先端的な技術や知識の発信拠点としての地域貢献活動の充実が期待されます。</p>
<p>C 委員：評価点 [4]</p> <p>積極的に地域貢献活動に取り組み、成果を着実に挙げている。</p>
<p>D 委員：評価点 [3]</p> <ol style="list-style-type: none">1. 資料 12-1-①-1, 2 は、最初の基準 1 の目的に入れるべきである。2. 教育・研究・社会連携（中期計画 12-1-①-1）の社会の定義が薄い。それにしては頑張っている。3. 全体に対する人件費（役員・教員・職員）が約 74%。431p のこの表は全学とすれば、農学部はいかほどか。全国の農学部との比較は、何%が適当と考えるか。

【基準1 3】 国際化の状況について

農学部/研究科の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

<p>A 委員：評価点 [3]</p> <p>留学生も年々増加しており、グローバル化が進められていることは評価できます。</p> <p>今後は外国人教員の増員や海外で活躍できる人材の輩出など、計画的に国際化を進めて下さい。</p>
<p>B 委員：評価点 [4]</p> <p>アジアブリッジプログラムなど教育面での国際化は、適切に行われています。中期計画に掲げられた海外大学や研究機関との世界レベルの研究が推進されることが期待されます。</p>
<p>C 委員：評価点 [4]</p> <p>海外フィールドワークを長年取り組んでおり、教育の国際化の成果を挙げている。</p>
<p>D 委員：評価点 [3]</p> <ol style="list-style-type: none">1. 卒業生の追跡2. 学生の日本語教育

3. 学生の日本（歴史・文化・風土・習慣など）

総合評価

A 委員

全体としては各項目について着実に実践が行われており、大学としての教育的質は向上していると評価できます。

ただ、多くの評価ポイントが学内だけでの評価に留まっており、他大学や一般社会との比較、検証が行われていないため、自己満足に陥る可能性があります。今後は視野を外部にまで広げた評価を徐々に取り入れて、更なる向上を図るよう努力願いたい。

教育に完璧はないと思いますので、常に努力を怠らず前進し続けてもらいたい。

なお、今回の評価で触れることが適切か分かりませんが、大学の行く先を大きく左右する可能性のある浜松医科大との統合問題について、現在進んでいる静岡と浜松に大学を細分化する案について、様々な情報から判断して十分な議論が行われたとは理解し難い。現案をいったん白紙に戻し、様々な関係者を交えた丁寧な議論を行った後、静大として一番好ましい選択をしてほしい。特に農学部の今後のグローバルな発展を考えた時に、個人的には工学部、医学部と別大学になることはメリットが無いと考えるので、総合大学として静大が発展する方向で統合問題を議論していただきたいと考えています。

B 委員

中期計画の中間年として、各基準の取組は順調に進捗されています。

学科やコースの再編による教育の充実、学部内の様々な組織体制の整備が進んでおり、今後、一層の静岡県の発展に寄与できる人材の養成が期待されます。

C 委員

静岡大学は重点支援①を選択し、地域への貢献が課題となる中で、静岡地区キャンパスの中核学部としての役割を適確に担っている。

1 法人複数大学制度への取り組みが検討されている中、静岡地区キャンパスの発展を考える上で、静岡県立大学との連携の重要性が高まると推定される。この観点において、農学部は薬学部及び食品栄養科学部との連携が可能であり、教育研究連携の中核的役割を果たすことができる。今後一層の関係強化を図っていただきたい。

国立大学法人化以降、運営交付金の削減が着実に実施される中で、外部資金の獲得とその間接経費の積極的な活用が不可欠となっている状況を考えると、科学研究費を含めてやや外部資金獲得力が弱い傾向が見受けられる。

教育改善に対する姿勢は適切で、高く評価できる。

D 委員

1. 大学の多面的機能を実施しているか再考：受信・討論・教育・研究・発信・宣伝・普及・還元・貯蔵・評価・提言
2. 大学の評価は、教育・研究・普及の総合評価
3. 必然性：教育・研究・普及
4. 対象：目標・計画・現状摘出・解釈・検証・実行・成果

5. 内容 : why, what, who, when, how, help, check
6. 必要 : 合理性・透明性・責任制・将来性・評価のゆくえ
7. 教員の適正判断 : 例えば A 教授は、教育 40%、研究 40%、普及 20%で、評価する。B 教授は、教育 10%、研究 90%。普及 0%で評価するなど、評価基準を新たに構築する。

静岡大学農学部/研究科 外部評価結果調査票

自己評価報告書の内容及び外部評価委員会での調査・確認内容等に基づき、以下の各基準について、「評価」と「コメント」をお願い致します。

コメント欄には、「優れた点」や「更なる向上が期待される点」、「改善を要する点」を中心にご記入願います。

なお、以下の基準の内容は、基本的に「自己評価結果報告書」に記載されている各基準に沿ったものとなっております。

この調査票は、外部評価委員会後の8月2日までにご提出願います。

【提出先】

静岡大学農学部総務係

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

電話：(054) 238-4810

各基準の評価は1～4段階で数字に○印を付してください。

4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。

3：概ね達成している。概ね適切・良好である。

2：改善が必要である。

1：抜本的な改善が必要である。

【基準1】組織の目的について

農学部/研究科の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

【基準2】 教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、農学部/研究科の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

【基準3】 教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

【基準4】 学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準5】 教育内容及び方法について

①（学士課程）

教育課程方針（カリキュラム・ポリシー）が、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

② (大学院課程)

教育課程方針が、学位授与方針と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等(研究・論文指導を含む。)が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準6】 学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業(修了)後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準7】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

【基準8】内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

【基準 9】 財務基盤及び管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】



【基準 10】 教育情報等の公表について

農学部/研究科の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】



【基準 1 1】 研究活動の状況及び成果について

農学部/研究科の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

農学部/研究科の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】



【基準 1 2】 地域貢献活動の状況について

本学及び農学部/研究科の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】



【基準13】国際化の状況について

農学部/研究科の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

【評価】 1 2 3 4

【コメント】

総合評価（全体を通してのコメントをお願い致します）

令和元年 月 日

外部評価委員名

○○○○

資料2 外部評価委員会次第

農学部外部評価委員会次第

日 時：令和元年7月5日（金）11:00～16:00

場 所：農学総合棟 225 室

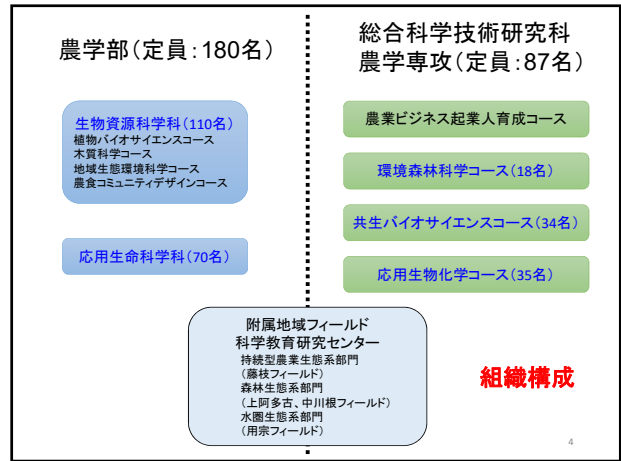
開 会

1. 農学部長挨拶
2. 出席者紹介
3. 委員長選出
4. 自己評価結果の概要説明
5. 質疑応答
6. 施設・設備の見学
7. 外部評価委員会
8. 講評

閉 会

（席上資料）

- ・ 農学部・農学専攻外部評価委員会出席者名簿及び次第
- ・ 外部評価の実施指針
- ・ 外部評価結果調査票
- ・ 自己評価説明資料
- ・ 自己評価報告書正誤表
- ・ 農学部案内



地域に根ざした総合農学教育

(教育の特徴参照)

本学部では、「生産技術」、「環境」、「生命科学・生物機能」などに興味を持ち、こうした問題解決の意欲に満ちた学生を育てることを目標に、県内唯一の総合農学教育機関として、地域の発展に貢献する数多くの人材を輩出している。

また農学の基礎となる自然に対する理解を深め、自ら問題発見・解決型学習ができる人材を育成するために、地域社会との連携も視野に入れたフィールド科学を重視した教育研究を行っている

生物資源科学科

生物生産技術と環境技術を融合した農学を究め、農林業と持続可能な社会の発展に貢献する人材を育成。

【ここが特徴！】

- ✓農学のほとんどの分野をカバー
- ✓入学後に学びたい4つの専門コースを選べる
- ✓自由選択科目が多い柔軟なカリキュラム
- ✓現場(社会)から学び、現場(社会)へ貢献

目的とアドミッションポリシー

農学部:

【育てる人間像】人間と自然の共存する循環型社会の構築を目指し、グローバル社会に適応できる総合力を備えた人材を育成

【目指す教育】人間社会と直結したフィールド科学を基盤に、生物生産を中心として、生物科学と環境科学を両面に配した広がりを持たせた教育

【入学を期待する学生像】自然科学、生命科学を学ぶ上で必要な適性と基礎学力を有し、人類の生存に関わる環境問題の解決、持続可能な生物生産技術の開発、生物機能科学の探求に強い意欲を持つ人

農学専攻:

【教育研究の目的】東海地域の豊かな環境や資源を背景に、環境・バイオサイエンスを基礎として衣食住を充足するための学理や技術を深化させた教育と研究を行い、地域や国際社会の持続的発展に貢献できる人材の育成

【求める学生像】農学における幅広い基礎知識を有し、研究や技術開発に対する強い意欲のある下記の学生を受け入れます。

1. 環境を重視した持続的な生物資源の生産と利用技術の開発に興味を持ち、独創性と応用能力並びに国際感覚を備えた学生
2. 人類生存に直接関わる生物資源や環境問題に強い関心を持ち、その解決に貢献しようという使命感あふれる学生

応用生命科学科

「応用生命科学科」では、化学と生物学を基礎として生命現象を深く理解し、バイオテクノロジーを利用して有用物質生産や食料とエネルギーの持続的供給技術を開発する人材を育成。

物理化学、有機化学、生化学、分子生物学の科目と、実験科目を学ぶことで、国内外の食品、医薬、化学等の産業のニーズに対応をした即戦力を身につける。



各学科の教員数(平成30年5月1日現在)

学科	生物資源科学科	応用生命科学科	計
教授	12	9	21
内数	専任	9	21
	女性	2	2
	外国人	1	1
准教授	23	10	33
内数	専任	10	33
	女性	0	3
	外国人	0	0
助教	6	3	9
内数	専任	3	9
	女性	0	1
	外国人	0	1
計	41	22	63
内数	専任	22	63
	女性	2	6
	外国人	1	2

基準3 教員及び支援者等

教員採用状況(平成27～29年度)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
教員採用数	7 (1) [0]	3 (0) [0]	1 (0) [0]
内訳	公募制	3 (0) [0]	1 (0) [0]
	任期制	0	0

(注) ()内は女性教員数、[]は外国人教員数

専任教員数と平均年齢の推移(平成27～29年度)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	
教員数	70	65	69	
内訳	専任教員数	65	59	63
	学内兼務教員数	5	6	6
	女性教員数	6	6	6
平均年齢*1	49.0	47.6	48.0	

*1 各年度5月1日現在
(注) 平成28年度より学科改組のため、学科に含まれていない教員がいる。

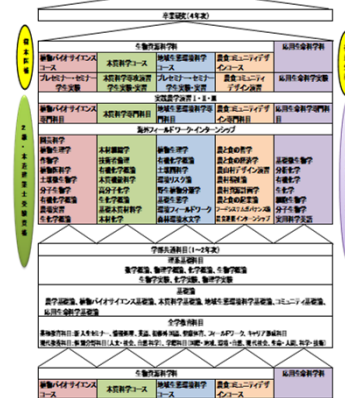
基準4 学生の受け入れ

入学定員充足率(学部)

	平成28年度		平成29年度		平成30年度	
	入学定員	入学者数	入学定員	入学者数	入学定員	入学者数
生物資源科学科	115	112 (5)	115	114 (5)	122	124 (5)
応用生命科学科	70	75	70	73	73	76
(3年次編入学)	10		10			
(10月入学)		1		1		1
合計	195	188 (5)	195	188 (5)	195	200 (5)
定員充足率(%)	96		96		103	

(注) カッコ内は地域創造学環(教育プログラム)の課程を履修している学生数

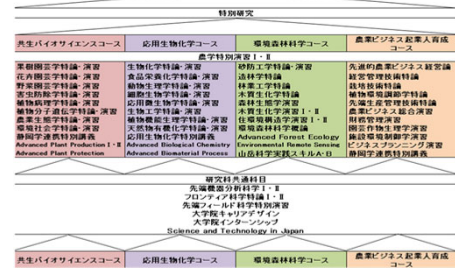
農学部の教育課程の基本構成



入学定員充足率(修士課程)

農学専攻 (定員:87名)	入学者			
	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
4月入学	51	76	80	71
10月入学	10	6	11	12
合計	61	82	91	83
定員充足率(%)	70	91	105	95

農学専攻の教育課程の基本構成



別表II 修了に必要な単位数(第11条、第16条関係)
農学専攻

コース名	科目区分	研究科 共通科目	コース 必修科目	選択科目	合計
共生バイオサイエンスコース		4単位以上	12単位	14単位以上	30単位以上
応用生物化学コース		4単位以上	12単位	14単位以上	30単位以上
環境森林科学コース		4単位以上	12単位	14単位以上	30単位以上
農業ビジネス起業人育成コース		—	12単位	18単位以上	30単位以上

基準5 教育内容及び方法

教育支援体制の強化

● 「農学部教育質保証委員会」の設置

- ・ 「教育の質保証ガイドライン」の制定
- ・ 「カリキュラムマップ」の作成
- ・ 「ルーブリック」による成績評価の試行

多様なニーズ,社会からの要請への配慮(学部)

- 3年次編入特別ガイダンス
- 諸外国の大学への短期留学時の単位認定
- 転学部・転学科の実施
- キャリア形成科目「キャリアデザイン」の必修化
- 実践農学演習 I, II, III

19

基準6 教育の成果

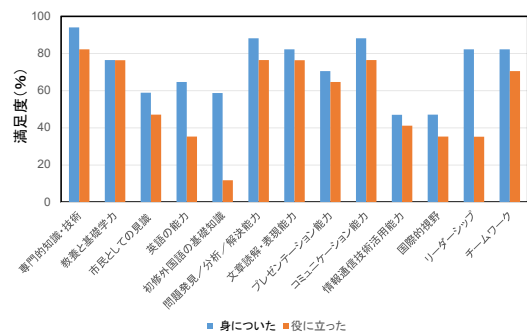
22

多様なニーズ,社会からの要請への配慮(修士)

- 山岳科学教育プログラムの設置
- 学部4年次における講義の早期履修制度
- 副専攻プログラムの実施
- 静岡県立大、東海大、岐阜大との単位互換
- 他大学で研究指導を受けることが可能
- 連携大学院(静岡県試験研究機関)で研究指導を受けることが可能

20

農学部卒業生の教育の満足度



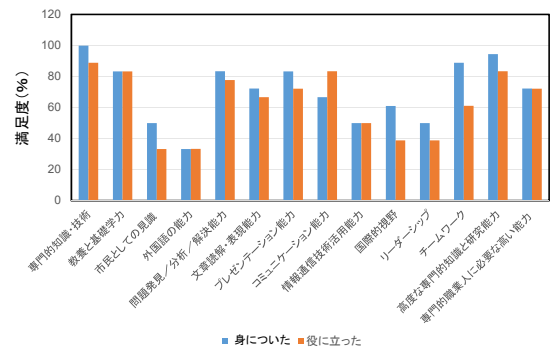
23

単位の実質化への配慮

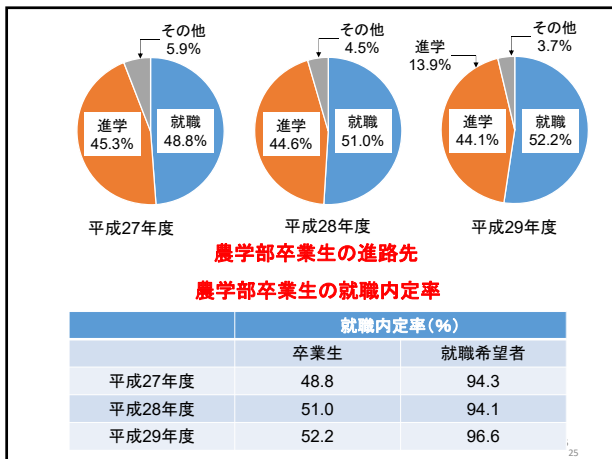
- GPA (Grade point average) 制度の導入 (平成21年度)
- 授業時間15回/期+試験1回の確保 (平成21年度)
- 年間履修科目の上限を制限するCAP 制導入 (平成25年度)

21

農学専攻修士の教育の満足度



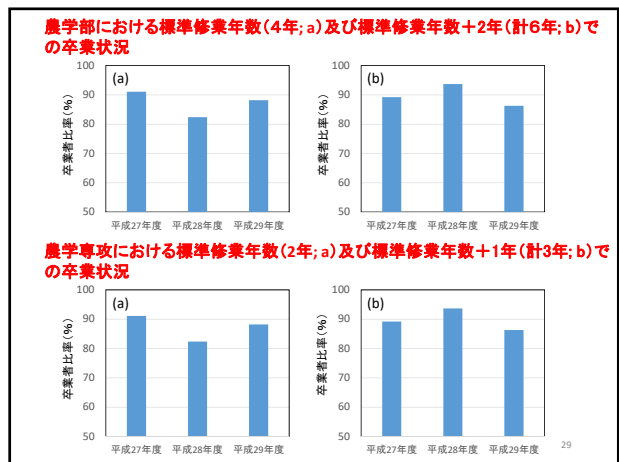
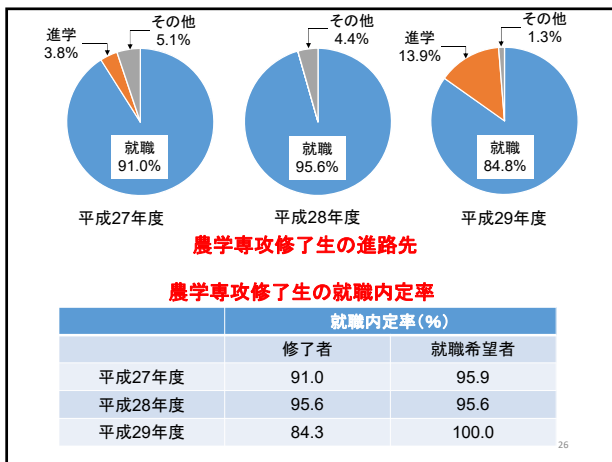
24



農学部卒業生・農学専攻修了生の就職先(地域別)

	農学部			農学専攻		
	H27	H28	H29	H27	H28	H29
北海道	0	0	2	1	0	0
東北	2	0	1	1	0	0
北陸	3	3	2	3	1	0
関東	27	25	23	35	19	26
静岡県	20	33	27	16	9	16
中部	23	8	14	9	7	15
関西	6	7	10	4	6	7
中国	2	2	1	0	0	1
四国	0	2	4	0	1	0
九州	0	0	0	0	0	0
海外	0	0	0	2	0	2
合計	83	80	84	71	43	67

北陸:新潟、富山、石川、福井
関東:茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨
中部:長野、岐阜、愛知、三重



農学部卒業生・農学専攻修了生の就職先(産業別)

	農学部			農学専攻		
	H27	H28	H29	H27	H28	H29
製造業	21	29	29	33	22	39
卸売小売業	9	8	5	5	4	2
公務員	29	23	23	13	1	7
サービス業	5	7	8	9	8	9
教育・学習支援	3	3	0	2	1	1
建設業	3	3	5	0	2	1
農林漁業	3	2	5	6	2	3
その他	10	5	9	3	3	5
合計	83	80	84	71	43	67

学会等での優秀発表・ポスター賞受賞者数

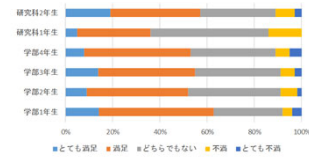
	平成27年度	平成28年度	平成29年度
農学部/農学専攻	13	15	13

日本応用動物昆虫学会大会においてポスター賞を受賞(2018/04/20)

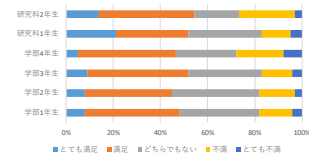
基準7 施設・設備及び学生支援

31

学生によるコンピュータの施設や設備に対する満足度



学生によるインターネットの使いやすさに対する満足度



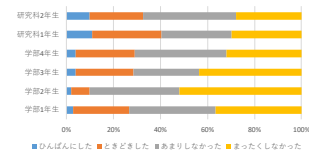
34

学生の学習・生活支援

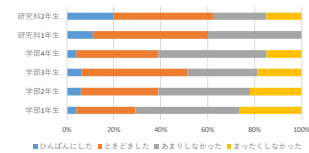
- 学務情報
 - ・ガイダンス
 - ・シラバス
 - ・学務情報システム
- 学生生活支援
 - ・何でも相談窓口、学生相談室 (生活相談・ハラスメント)
 - ・就職支援; 就職戦略室 (各種説明会・OBによる相談会)
- 学生表彰制度
 - ・成績優秀者(学部表彰2年次及び卒業時、各学科1名)
 - ・成績優秀者(学長表彰卒業時に学部1名)
 - ・成績優秀者(授業料免除学部4年、修士2年 各1名)
 - ・フィールド科学演習 I 成績優秀者表彰数件
 - ・学会受賞者表彰

32

学習に対する教員への相談、学内の学習支援室の利用

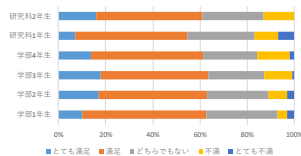


教員に対する親近感

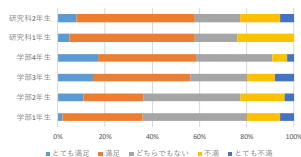


35

学生による実験室の施設や器具に対する満足度

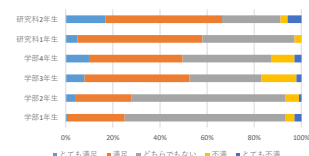


学生による総合的な「キャンパス環境・設備」に対する満足度

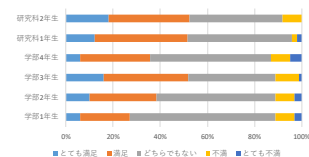


33

学生による総合的な「就職・進学支援」に対する満足度



学生による奨学金など学費援助に対する満足度



36

基準8 内部質保証システム

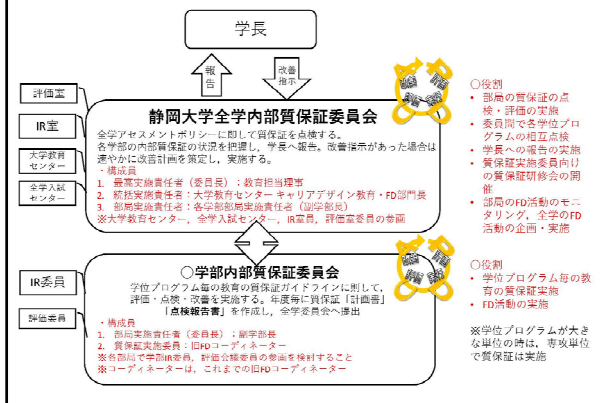
37

FD研修等への農学部教員の参加者数

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
ルーブリック作成に向けた勉強会	-	-	7
全学FD・SD講演会	1	-	-
農学部FD研修会(第1回)	52	50	52
農学部FD研修会(第2回)	-	45	-
新入生セミナーのルーブリック作成に関する意見交換会	-	-	9
ハラスメント防止講演会	-	-	37
障がい学生支援講演会	-	-	34
障がい学生支援講演会(全学)	-	-	4
新入生セミナー ルーブリック使用説明会	-	-	12
FD講演会「内部質保証の可視化とIRについて」	-	-	50
合計	53	95	205

40

静岡大学教育の質保証体制案



基準9 財務基盤及び管理運営

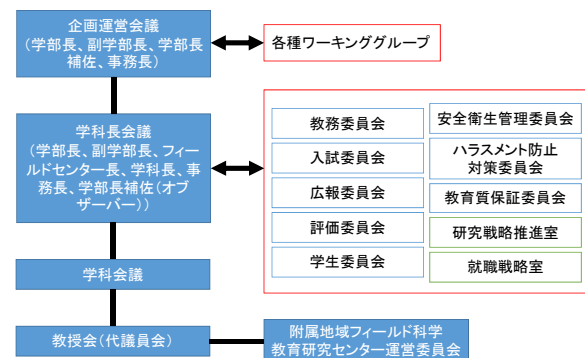
41

【主な取り組み】

- 農学部/農学専攻教育の質保証ガイドラインの制定
- カリキュラムマップの作成
- ルーブリックの導入(新入生セミナー、卒業論文、修士論文)

39

管理運営体制



42

基準10 教育情報等の公表

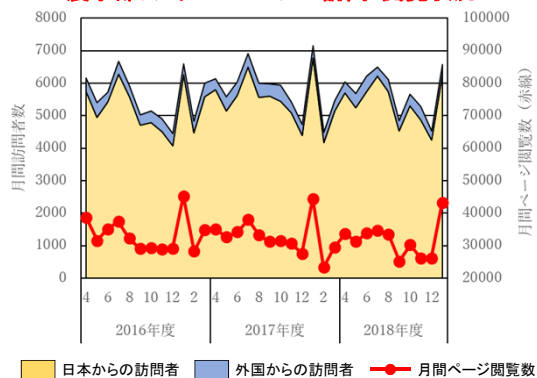
43

学長及び領域長による研究支援

		H27年度	H28年度	H29年度	
学長 裁量 経費	若手研究者 支援経費	採択件数	2	2	1
		金額 (千円)	1,300	2,000	500
領域長 裁量 経費	学術論文 発表支援	件数	10	11	9
		金額 (千円)	205	650	550
	プロジェクト 研究推進費	件数	-	2	3
		金額 (千円)	-	800	1,200

46

農学部公式Webページの訪問・閲覧状況



44

研究活動の実施状況

		平成27年度	平成28年度	平成29年度
原著論文	英文	111	91	102
	和文	39	24	48
	合計	150	115	150
学会発表	国内	275	285	306
	国際	75	47	69
	合計	350	332	375
著書		23	11	20
受賞		2	4	4
特許出願		10	6	11

47

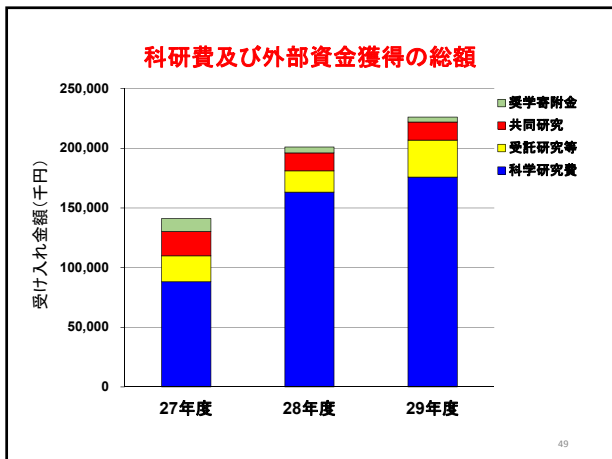
基準11 研究活動の状況及び成果

45

科学研究費補助金の種目別採択件数及び補助金額

研究種目	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	新規	継続	新規	継続	新規	継続
基盤研究A			2		2	
基盤研究B	1	7	4	7	5	7
基盤研究C	6	7	4	10	3	10
若手研究A			1		1	1
若手研究B	2	4	2	7	1	4
挑戦的研究(萌芽)					2	
挑戦的萌芽研究	5	3	8	6		11
研究活動スタート支援	2	1	2	2		2
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)					1	
新学術領域研究 (研究領域提案型)			1		1	1
合計(千円)	88,270		163,300		175,917	

48



基準12 地域貢献活動の状況

教員の学会での表彰一覧

年度	受賞学会	受賞題目	受賞者
平成27年度	植物化学調節学会賞	アブジジン類の代謝不活性化とシグナル伝達を制御する化合物の創出研究	轟泰司
	乾燥地科学共同研究発表賞	植物のストレス耐性を制御する新奇化合物の創出	轟泰司
	日本家畜学会賞	家畜の受精を制御する分子群の機能に関する研究	笹浪知宏
平成28年度	日本農学会賞	キノコの産生する2次代謝産物に関する天然物化学的研究	河岸洋和
	読売農学会賞	キノコの産生する2次代謝産物に関する天然物化学的研究	河岸洋和
	日本木材学会賞	高活性リグニン分解菌によるリグニン分解とその応用に関する研究	平井浩文
平成29年度	日本農芸化学会 奨励賞	菌類が産生する機能性物質に関する研究	崔宰薫
	日本きのこ学会賞	きのこに関わる機能性物質に関する研究	河岸洋和
	グリーンサステイナブルケミストリー賞 文部科学大臣賞	フェアリー化合物を用いた新規植物成長調節剤の創製	河岸洋和
	日本植物細胞分子生物学会 奨励賞	植物の生長や化学防御に寄与する二次代謝産物の生合成研究	大西利幸
	日本きのこ学会 奨励賞	担子菌類における環境汚染浄化に関する研究	森智夫
	日本家畜学会 (Outstanding Paper Award)	Expression of Prolactin Receptor on the Surface of Quail Spermatozoa	笹浪知宏
	日本草地学会賞	ライグラス類の野生化とエンドファイト共生に関する研究	山下雅幸

社会人のブラッシュアップへの取組み

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
科目等履修生(人)	2	2	2
公開講座・講演会(回)	3	-	2
シンポジウム(回)	-	-	1
市民開放授業(科目数)	73	73	71

植物耐熱性向上資材研究開発コンソーシアム

清掃工場の家庭ごみからできるスラグから農業用肥料製造

温泉トマト

植物性乳酸菌 匠乃キムチ商品化

地域フィールド科学教育研究センター各施設の利用件数

	年度	平成27年度			平成28年度			平成29年度		
		農	森	水	農	森	水	農	森	水
教育利用	利用日数	126	62	2	101	61	1	102	73	1
	使用者数	3551	1487	27	2928	1352	29	4346	1325	28
研究利用	利用日数	48			67			196		
	使用者数	114	349	6	340	390	6	145	709	7
地域貢献その他	利用日数	141			89			85		
	使用者数	4411	247		4365	254		3436	55	

農・・・持続型農業生態系部門
森・・・森林生態系部門
水・・・水圏生態系部門

静岡県内私立高校への出前授業・学部説明会件数

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
件数	10	11	11

静岡県先進的農業推進協議会・平成29年度研究成果情報交換会 開催要領

- 1 主 旨
研究成果や最新技術、時事テーマ等、静岡大学と静岡県に共通する研究素材等について情報交換し、研究分野の連携強化に繋げるため研究成果情報交換会を開催する。
- 2 日 時 平成29年 11月9日(木) 13:00~16:40
- 3 会 場 AOI-PARC (沼津市西野317)
- 4 参集機関 東部総合庁舎 別館2階婦人センター集会室 (沼津市高島本町1-3)
静岡大学、農林技術研究所、畜産技術研究所、農林事務所、県関係部局、関係団体等
- 5 内 容
(1) 開 会
(2) あいさつ
(3) AOI-PARC 施設見学
(4) 研究成果等の発表①
(5) 閉 会

55

外国人留学生受入数

	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
農学部	4 中国 2 韓国 1 インドネシア 1	2 中国 2	2 中国 2	5 中国 2 インドネシア 2 ベトナム 1	6 中国 1 インドネシア 3 ベトナム 1 ミャンマー 1	3 インドネシア 1 ベトナム 2
農学研究科	7 中国 2 インドネシア 4 ベトナム 1	3 インドネシア 1	2 中国 1 インドネシア 1	1 インドネシア 1	0	0
農学専攻	1 インドネシア 1	19 中国 1 韓国 1 インドネシア 10 タイ 5 バングラ 1 デシユ 1 ベトナム 1	15 中国 2 韓国 2 インドネシア 6 タイ 4 バングラ 1 デシユ 1	20 中国 2 韓国 1 インドネシア 11 タイ 4 バングラ 1 デシユ 1 ベトナム 1	17 中国 8 インド 1 インドネシア 3 タイ 3	24 中国 7 韓国 1 イギリス 1 インドネシア 13 タイ 1 フランス 1

58

基準13 国際化の状況

56

過去2年間の農学部/農学専攻による国際交流支援

ショートステイプログラム (農学専攻)	期間:2016.12.1~2017.2.28 2017.3.1~2017.5.5 対象:留学生4名受入 支援内容:領域長裁量経費から768千円 (渡航費の補助、生活費補助ほか)
環境と農業を支えるグローバル人材育成プログラム「海外フィールドワーク演習」	期間:2016.10.16~2016.10.23 対象:農学部生26名派遣 支援内容:領域長裁量経費から661千円 (協定派遣 短期研修・研究型)学生交流 推進タイプ(タイプB)
ショートステイプログラム (農学専攻)	期間:2017.7.1~2017.9.1 2017.12.2~2018.3.30 2017.12.3~2018.3.31 対象:留学生3名受入 支援内容:領域長裁量経費から853千円 (渡航費の補助、生活費補助ほか)
環境と農業を支えるグローバル人材育成プログラム「海外フィールドワーク演習」	期間:2017.9.16~2017.9.23 対象:農学部生19名派遣 支援内容:領域長裁量経費から1210千円 (協定派遣 短期研修・研究型)学生交流 推進タイプ(タイプB)

59

部局間協定による海外の協定校

協定大学	協定国	締結年
天津農学院	中国	2014.12.17
木浦大学校 食品工学科・食品産業地域革新センター	韓国	2008.12.11
国立研究院樹木・木材研究所	イタリア	2007.6.14
アッサム大学 生命科学部	インド	2017.10.20
スーリヤ大学 生命科学部	インドネシア	2016.5.24
ポゴール農科大学 林学部	インドネシア	2014.11.5
ベトナム国立林業大学	ベトナム	2011.12.15
ランブン大学農学部	インドネシア	2018.10.26

57

大学院特別研究派遣制度による派遣

	人数	コース	派遣先
平成27年度	1	共生バイオサイエンス	キンモンクット工科大学トンブリ校
	1	環境森林科学	国立研究開発法人森林総合研究所
平成28年度	1	共生バイオサイエンス	キンモンクット工科大学トンブリ校
	1	共生バイオサイエンス	国立研究開発法人森林総合研究所
平成29年度	1	共生バイオサイエンス	キンモンクット工科大学トンブリ校
	1	環境森林科学	カセサート大学

60

資料4 評価委員会名簿

平成30年度 評価委員会メンバー

委員長	学部長補佐	平井浩文
委員	生物資源科学科	小林研治
		鮫島玲子
		柴垣裕司
		樽本正明
	応用生命科学科	加藤竜也
		崔宰熏
オブザーバー	副学部長	森田明雄
	学長補佐	木村洋子
	IR室員	与語圭一郎
情報提供	事務長	渥美武
	学務係長	川崎里恵
	総務係長	藤井真貴子
	前総務係長	山田恵子

あとがき

今回の外部評価は、静岡大学農学部・総合科学技術研究科農学専攻の教育研究活動について、平成27年度から平成29年度の3年間を中心に、学外の有識者の方々から客観的な評価を頂いた。

この間、本学部では3期の開始年度（平成28年度）に共生バイオサイエンス科、森林環境科学科、応用生物化学科の3学科から生物資源科学科、応用生命科学科の2学科に改組し、同時に生物資源科学科には植物バイオサイエンス、木質科学、地域生態環境科学、農食コミュニティデザインの4コースを設置した。一方、修士課程においては、平成27年度に農学、理学、工学並びに情報の理系4研究科を総合科学技術研究科に「大きくくり化」したことに伴い、農学研究科も農学専攻として出発した。これらは、静岡大学が策定した第一期および第二期中期目標及び中期計画を反映させたものであると同時に、前回の外部評価・有識者懇談会を受けて実施したものである。

その結果、外部評価委員会からは、農学部・農学専攻が行ってきたこれら様々な取組みに対して、「十分に達成している。」あるいは「概ね達成している。」との高い評価を頂いた。その一方で、大学の使命として、教育、研究の他に、「地域貢献」の重要性についての指摘も頂いた。今後は、今回頂いたご意見・ご指摘を改善目標として反映させると共に、学生、社会、教職員にとって魅力ある静岡大学農学部・農学専攻にしたいと考えている。

最後に、外部評価委員の方々には、ご多忙中にもかかわらず、事前に自己評価報告書に目を通して頂き、委員会席上あるいは外部評価結果調査票による数多くの貴重なご指摘やご提言を頂きました。心より感謝申し上げます。また農学部・農学専攻の教職員には、自己評価報告書作成のための資料・データの提供や収集などのご協力を頂きました。この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

令和元年9月吉日
静岡大学農学部副学部長
前年度評価委員長
平井 浩文